

た。ある日家族と一緒に食事をした時に、父が手紙を読んだよと言いました。僕は、ああ読んだの？と普通に答えると、思ってもいない返答が帰ってきました。「手紙を読んで長い間心につかえていたものが完全に取れた、もらった手紙が神様からの最高のプレゼントだ」と言ってくれたのです。家族みんなにも伝えて、本当に嬉しそうに喜んでいました。また教会の壮年聖書勉強会で、私の手紙を読んで聞かせたそうです。同じ年代の壮年たちにもその恵みの大切さと喜びを伝えられたのだそうです。その壮年たちも父親としてこんな言葉を息子から聞けたらどれほど幸せだろうと、大きな影響を受けたそうです。

私は牧師になって、父親に無意識に持ってきた葛藤を解消するように、みことばから示されて、父親にそれを打ち明けてお互いに赦しと謝罪の時を持ったことがあります。だから父にはもう何の過去の葛藤も残っていないと思っていましたが、具体的なセミナーと証の言葉によってさらに深く真理に照らされて、この大きな恵みに預かることができましたのです。

妻や子供に関してもそうです。私は自分の結婚相手と子供に私の人生のすべてを捧げて幸せにすると心から決めていました。だから結婚後も最大限尽くしてきたつもりでした。しかし、具体的な証と実践のプログラムの中で、まだ実践できていない多くのことがあることに気づきました。

愛する人一人を幸せにできなくて、他の誰も幸せにできるはずがない。たとえ教会で他人をどれだけ幸せにできても、最も近い家族を幸せにできなければ自分自身も幸せではありえない、との思いが深く突き刺さりました。だから妻と子供に対して見本になる信仰の父、主に従順な父、愛を实践する者にならなければ、と掛け声をする度に思いました。父親には神様から与えられた権威があり、それを主の喜びになるように用いれば家庭を生かすが、間違っただけで使えば家庭を壊したり喜びのないものにしてしまうことを心に刻みつけられました。

さらに、妻を愛し、父と母を敬いなさいという聖書の最も基本的で大切な原理が最も踏みつけられ無視されていることこそ、現代社会の家庭崩壊に歯止めがかからない原因だと痛感します。自分の家庭が最大の幸せと喜びの場所になるように、祈りと従順をもって主に従っていきたくです。その思いを刻みつけてくださった父親学校の奉仕者スタッフお一人お一人に心から感謝したいと思います。すべての栄光を主にお返しいたします。



神戸5期 特集

開催報告

神戸支部 金漢俊

主の御名を崇め、賛美します。

主の恵みの中で、神戸支部は、父の学校神戸5期を、10月6日(土)～8日(月)の3日間、神戸東部教会堂にて開催できました。受講者は、芦屋福音教会、JFP、神戸東部教会に所属する信徒6名と求道者1名の計7名でした。神戸支部指導牧師 裊明德牧師をはじめ、神戸支部を卒業された牧師先生方多くのご支援のもと、複数の教会から卒業生25名の奉仕者が集められ、共に恵みを共有できました。メイン講師としてお招きしました福澤満雄先生の紙芝居のようにわかり易く、心に届く講義を通して、主は、5期をより豊かなものして下さいました。

1年空きましたが、今回の5期は4期に続き、神戸支部自力での開催でした。自力と言いつても、支部の成長のための意味合いであり、意気込みであって、十分に成熟している訳ではありませんので、実は、4期同様、不安の中での開催でした。でも、新しく、頼もしい4期卒業生のメンバーを加えられ、その分、皆で心合わせて祈り、準備に励むことができました。

開催中も、一日一日を大切に、真剣に臨むことができました。奉仕者に、神戸支部以外から素晴らしいメンバーを主が導いて下さったことも、5期の大きな力となりました。誰に言われる訳でなく、メンバー各々が、仕事日程をやり繰りしたり、海外転勤日を延ばしたり、メンバー一人ひとりが、自分自身にチャレンジする5期だったと思います。

その結果、5期を通して、受講者皆とご家庭に注がれている主の大きな愛を再確認頂けたこと、求道者の家庭が皆で教会に行かれるよう導か

証し 信州2期父の学校に参加して

＜イエス様が導いてくださった父の学校＞



白澤栄一(信州2期)

(クリスチャン・カンパニー)

人生の最後の30年が麗しく、正しい方向であることが大切である一と、父の学校の冒頭でキム長老に教えていただきました。その30年に踏み出した者として、父の学校は、父親として、イエス様の正しい方向を向いて従順に歩む確信をあらためて与えていただきました。キム長老はじめ通訳の山口先生、父の学校に導いていただいた小岩井先生、父の学校の先輩の皆さまに感謝申し上げます。

私は、10年あまり前、イエス様に会って家庭崩壊の寸前から救われた者です。男性・夫・父親としての的はずれな方向に行ってしまう者でした。この父の学校に参加するようにと、神さまが導いてくださったように感じています。

私の心の中の闇は、両親に縛られていたことでした。実家の農業の手伝いや母の体調のことを考えるだけで、胸の奥が重く痛み、それは中学生のころから50歳まで、心の重りのようになっていました。両親に対して「いい顔」をして、一方、会社員としても「いい人」を懸命に演じ続けてきました。

頑張っただけを続けるストレスのために、どんどん酒量が増していきました。午後から深夜までの勤務を終えて、居酒屋や自宅で朝方まで酒を飲み、朝から昼まで眠り、午後2時ころ出勤する、といった日々でした。そして連休があれば実家に出掛けるのです。妻と3人の子と私との距離は25年かけてどんどん広がってしまいました。私はいつも不機嫌で妻と会話もあまりしなくなり、にらみつけるような状態で、家庭崩壊寸前でした。「男はその父母を離れ妻と結び合い、ふたりは一体となる。」この結婚の基本である「父母を離れ～」が



私は出来ていなかったのです。

そんな時、妻が万座温泉で牧師先生のお話があるが、夜の山道なのでどうしようか、と言うのです。「送って行こうか。」なぜか不思議に素直にそう言えたのです。

せっかく来たからと私もその集会に参加しました。特攻隊の生き残りという牧師先生は、自分が救われた時の話をされました。路傍伝道の宣教師が語る聖書のことばに先生は「私は化学変化が起きたようでした。新しく造られたのです。」と救われた時の感動を語りました。感想を求められた私は「私も化学変化が起きそうです。」と素直な思いになっていました。

数ヶ月後、妻から集会に誘われました。この時も同じ聖書のことばが私を突き刺しました。「だれでもキリストの内にあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。」(Ⅱコリント5:17)

どんな人生もすべてが新しくなる。いつまでも暗いベールに覆われたような生活をしていたくない。イエス様に触れていただき、牧師先生に祈っていただき、涙が流れました。50歳の時でした。実家と会社で「いい人」を演じ続け、自分のことしか考えなかったこと、最も大切にすべき妻と子を「踏み台」にして生きてきたことを悔い改めました。翌年、私は洗礼を受けることができました。

30年以上あった「胸の重り」が、ずっと消えたのを覚えています。家庭が回復されて妻と子供たちと一体となったことを感じ、なんとも言えない自由と平安を覚えます。父母もイエス様を信じて天に召されました。

父の学校で、30年近く耐え忍んでくれた妻に手紙を書きました。「あなたは、神さまが私を救うために遣わされた御使いのようです。」と、あらためてお詫びしました。その時、妻からももらった返事は宝物です。子どもたちにも手紙と「愛らしい20項目」を送りました。東京に離れている3人ですが、心はさらに近くなっていくことを覚えます。

愛する妻の足を感謝の思いで洗いました。私の内側にも聖霊様が働いてくださって、洗いよめてくださり、新しく造られた者としてくださったことをあらためて確認することができました。

私が救われた時、愛する妻が断食の祈りを8日間も続けていたことをずっと後になって知りました。生きて働いておられるイエス様がその祈りに答えてくださったことを感謝いたします。

埼玉 2期 特集

開催報告

金聖守（東京1期）



埼玉県吉川市高久に県立吉川高校の隣にある3階建ての教会。鄭ダビデ牧師が牧する吉川チャペルです。教会の前には緑の平野が広がり、地平線と空が出会うところには富士山がそびえています。

7月14日(土)10時からここで20人位の男性の賛美が力強く吉川の平野に響きました。この賛美は祝日の16日(月)まで3日間続きました。父の学校埼玉2期がここで開かれたのです。志願者12名の中、修了者は11名、内牧師が3名。体調不良により未修了の方が一名でした。

今回は5つの講義を、父の学校指導牧師の福澤満夫兄(75歳)が担当されました。50歳まで牧師として、その後25年間巡回伝道者として、国内外に福音を語ってこられました。その講義での生々しい証は、信徒だけでなく、参加した牧師や教職者たちにも大きなチャレンジと感動を与えました。

進行者はリ・ヒョンウ(李炯雨)兄。彼は2006年2月東京1期修了以来、賛美リーダー、TL、開設リーダーを経験し、現在海外担当事務局長として奉仕をしています。彼の楽天的な持ち味が進行にも反映され、志願者とのインタビューは、笑いと涙を誘いました。ある志願者は、「彼が韓国人だから言えたことで、日本人だったら、そういう話ではできませんでした。」と言っていました。

TLは山形の今井和彦兄、東京の三谷恭寛兄、横浜の村上洋一兄の3名。志願者は同期会を通して埼玉地域の家庭回復に力を出し合うことを約束して、3日間の名残惜しい解散をしました。

後日、素晴らしい仕上がりの修了アルバムが横溝兄から届けられました。ある奉仕者は「埼玉2期の奉仕で恵まれて帰り、誕生日の息子さんに「おめでとう」とメールを送ったところ、祝福されたメールが戻って来た」と、家族関係の回復を感謝していました。一方、文明の利器“携帯”を操作している奉仕者があつた、という反省点も指摘されました。

楽しい、静かな、癒しと回復がある埼玉2期でした。皆様、ご苦労様でした。



証し 埼玉 2期父の学校に参加して

埼玉 2期 鄭ダビデ

ハレルヤ!

夫、父としての自分を悟ることができるすばらしいチャンスをごくださった神様に感謝します。

韓国からの宣教師である私は、韓国にいる時から父の学校のことをよく聞いていました。日本にもこの働きは絶対に必要だと思っていましたが、私たちの教会で開催するとは考えもしませんでした。

どのようにして開催できるかなど、心配もありましたが、本部の方で執り成しの祈りをはじめ、細かいところまですべて奉仕して下さり、開催教会としては本当に助かりました。一ヶ月前から毎週の木曜日にスタッフたちが現場に集まって賛美し、分かち合い、祈りながら開催に備えました。

苦しんでいる日本の家庭を福音をもって回復させたい、お父さんたちを力付けたいと願うメンバーが集まって、信仰と希望と愛による結束が感じられ、準備段階から恵みを受けました。

短い三日間でしたが、内容は濃く、スタッフたちの献身された姿には頭が下がりました。それに、福澤先生の生きた証と先輩たちの回復の証には大きな感動と慰めがありました。

愛する妻に手紙を書き、子どもたちにも手紙を書きました。私が手紙を渡した時、夫から父から手紙を受け取った家族の表情は今も忘れません。嬉しかったでしょう!

いつも妻と子どもたちを愛していると思っただけでしたが、手紙を書いてみると気づいていなかったことが沢山ありました。大切なこの悟りを実践していこうと努力しています。

たった一度父の学校をやったからと言って急激な変化はありませんが、車のルーム・ミラーにかけてある「主よ!私が父親です」と書かれた十字架を見るたび、心に決意します。「主よ!夫らしい夫となりますように、主の前で恥ずかしくない父となりますように。」と。

「主よ!夫らしい夫となりますように、主の前で恥ずかしくない父となりますように。」と。

奉仕して下さった福澤満雄先生をはじめ、奉仕して下さった皆様に心から感謝します。そして、この働きをこの地で行なわせて下さった神様に感謝します。この働きに主の導きがありますことを祈ります。ハレルヤ!

名古屋 1期 特集

開催報告

開設リーダー：吉原学師
(名古屋1期、名古屋わが教会牧師)

「そして、これらすべての上に、愛を着けなさい。愛は結びの帯として完全なものです。」

コロサイ3:14

今回は、中部地域で初開催という事もあり、大きな反響がありました。2009年のラブソナタの開催で繋がったネットワークを用いて、広報活動をし、13教会、37人の人々が集まりました。

特徴としては、大半がちょうど団塊世代が育てた子供達が親になった30、40代の子育て世代でした。忙しい父親との接点が弱い世代。自分流で葛藤し、失敗し模索しながら子育てをしてきた彼らに、正しい道しるべを示す時となりました。

ある奥様は「諦めかけていた家庭が父の学校を受けて、本当に救われた」とメールを頂きました。味わった事がない救いを体験したという意味です。救いは人生の成功や所有にではなく家庭にあり、一番身近な家庭こそが福音の力と神の御国の喜びを体験する所だと始めて知ったそうです。

日本はなかなか宣教が進まないという現実があります。それは一重に信仰継承が難しかったという事です。金長老は「日本宣教の一つの切り札があるとすれば、それは家庭を通した垂直宣教だ!」と言いました。私も牧会者として、家庭を後回しにした教会成長も宣教もあり得ないと強く示されました。日本の救いと宣教は家庭と父の回復にかかっています。今後、日本において父の学校が新たな家庭回復と宣教のカギとして豊かに用いられる事を切に祈ります。

最後に、今回は、東京と大阪のドリームチームでの奉仕が成され、延べ30人のスタッフが仕えて下さいました。つながりの中に神の御業が現れました。

小さい事を、大きな愛で仕える姿に、父の霊性とイエス様の姿を見ました。仕えて下さった父たち一人一人に心から感謝します!

愛します!
祝福します!



証し 名古屋 1期 父の学校に参加して

名古屋 1期 金智満
(名古屋シオンチャーチ牧師)

父親学校では、知っているつもりでいたことや知らなかった多くのことに気づかされました。聞くだけでなく、学んだことを実践し、それをお互いに確認して証することを通して、一人一人が、逃れたりごまかしたりできない状況に置かれたましたが、それによって普段取り組まないことや、無意識に避けている行動を真剣に実践する恵みにあずかりました。

父親とはどういう存在なのかを学ぶ中で、父親のことをもう一度深く考えました。特に父親への手紙を書きながら、こんなにも私のことを守ってくれていたんだ、愛するがゆえに厳しくされたんだと、深く父親の愛を確認することができ、大きな感動が溢れました。

父は牧師であり、牧会生活の中で多くの苦しみを乗り越えてこられました。当時は父のことを深く理解できませんでした。なぜ家の中でこんなに厳しいのか、なぜ私には妥協を許してくれないのか、また、お父さんにはできても僕はまだそんなに熱心ではないからできないと思っていました。

しかし、自分自身がイエス様に深く出会い、十字架を体験し、自分も牧師になって牧会を始め、また一人の息子の親になって、その中で父親のことを少しずつ理解するようになっていきました。父親の影響について学び、父親への手紙を書いている間に何かが大きく解放されたように感じました。いつの間にか当たり前のように受け取っていた愛、理解しているようで理解していなかった父の心に触れたように感じたのです。本当に子供というのは親の愛と心を理解していないんだと痛感しました。最も近い関係だからこそ見えていないことがあったのです。

この手紙を通して大きな主の恵みが始まりまし